

訪ねてみたい台北市内の歴史再生空間

片倉 佳史

本連載最終回となる今回は台北市内の歴史再生空間を紹介したい。台北では老建築のリノベーションと再利用が盛んに行なわれており、一種の潮流として注目されている。こういった再生空間はカフェやレストラン、ギャラリーなどになっている。いずれも気軽に入ることができるので、古きよき時代の香りを感じ取ってみよう。

青田七六～大学教員住宅を生かしたカフェ

まずは台北市の南部、国立台湾大学（旧台北帝国大学）に近い青田街のリノベーション物件を紹介したい。この一帯には戦前の日本家屋が今も数多く残っており、独特の雰囲気をもったエリアである。日本統治時代後期に整備され、旧台北帝国大学や旧制台北高等学校の教職員住宅が建てられていた場所である。そして、隣接して司法関係者や税関職員などの官舎が集まっていた。

この一帯は台北市の中でも比較的后発の開発エリアで、昭和期に入ってから整備されたことになんで「昭和町」と呼ばれた。家屋はいずれも広い庭を擁しており、鬱蒼と生い茂った南国の植物が独特な雰囲気を醸し出している。その中にひっそりと木造家屋が建っている。

青田七六もそういった建物の一つである。ここは台北帝大で教鞭をとり、微生物学の権威として知られた足立仁教授の邸宅をリノベーションしている。足立教授は北海道帝国大学を卒業後、1926（大正15）年5月3日付けで台湾総督府高等農林学校教授として台湾に渡った。その後、すぐに欧米視察に出かけ、1929（昭和4）年3月23日付けで台北帝大農学部の教授となっている。専門は応用微生物学で、土壤微生物に関する研究で特に製糖事業の発展に大きく寄与した。

家屋の竣工は1931（昭和6）年とされる。敷地

面積が206坪と広く、ゆったりとした配置となっている。中央に母屋があり、四方が緑に包まれている。当時から現在のように繁茂する緑を想定していたかどうかは不明だが、豊かな住環境を意識していたことに疑いはない。

建物は和洋折衷のスタイルで、洋間と和室で構成されている。日本統治時代初期に各地で設けられた官舎は純和風であることが多かったが、大正期以降は和洋折衷のスタイルが増えていった。ここもそういった流れの中にあり、居間や食堂、書斎は洋間となっている。通気と採光にも配慮がなされ、屋内のどこにいても薄暗さや湿気を感じることはない。

家屋の南側には長い廊下が設けられている。ここは「縁側」となっており、適度に色あせた木板が印象的だ。現在は痕跡を残していないが、庭にはプールもあったという。その跡地は客席が設けられ、南国の日差しを浴びながら、くつろぐことができる。

戦後を迎え、日本人が台湾を離れた後は、この建物は国立台湾大学の管轄下に移る。所有者も足立教授に代わって、地質学の権威である馬廷英教授が主となった。そして、馬教授が他界した後も遺族はここに住み続け、建物を守ってきた。筆者はご縁をいただいて、2000年に初めてここを取材したが、その時も、庭の手入れなどがしっかりと行き届き、住人の人柄が伝わってきたことを覚えている。



青田七六は台北を代表するリノベーション物件。毎月第一月曜日が定休日となっている。営業時間は11時半から21時まで。台北青田街7巷6号(02-2391-6676)。



ここ数年、老家屋の保存運動が熱心に進められ、日本家屋の趣きを保ちつつ、カフェなどとして再生させる動きが起きている。

現在、この家屋は黄金種子文化事業有限公司という企業によって運営されている。リノベーションの上、カフェ・レストランとして生まれ変わり、人気を博している。修復については古建築再生というコンセプトの下、あくまでも原型に忠実であることにこだわったという。戦後に改造された部分や新しく取り付けられたものは本来の姿に戻すために取り払われ、窓ガラスなど、残せるものはできるかぎりそのまま用いたという。さらに、雨漏りや地震などにも対処するべく、補強工事が行なわれ、1年の歳月を費やしている。

青田七六がオープンしたのは2011年6月22日。現在は食事のみならず、オリジナルの点心類やデザートのほか、足立教授が心血を注いだ製糖事業の研究にちなみ、さとうきびを用いたオリジ

ナルドリンクなどもある。日によっては席がなくなってしまうことがあるので、大人数で訪問する際には電話予約を事前におきたいところである。

台北松山文創園區～台北最大の公共空間

次に紹介したいのは日本統治時代の産業施設を総合文化空間として整備したスポットである。ここは台北を代表する公共空間として知られ、諸外国からも多くの行楽客が訪れている。ガイドブックなどでは必ず紹介されているスポットである。

台北は日本統治時代から台湾最大の人口を誇る都市として君臨していたが、盆地に位置しているために、市街地の面積は小さく、発展には限界があった。そのため、工場や産業施設は郊外に設けられる傾向があった。

特に規模の大きな工場などは輸送の利便性の高さから縦貫鉄道に沿って設けられることが多かった。ここはその中でも最大規模を誇った施設である。現在はその広大な敷地を利用し、公共空間が整備されている。

この工場が設けられたのは1937(昭和12)年のことだった。台湾総督府専売局は当時は空き地が広がっていたというこの場所にタバコ工場を開設することを決めた。鉄道線路からも近く、かつては車窓にこの工場が見えたというが、現在は線路はすべて地下化され、その跡地には市民大道という道路が新設された。なお、その北側にはかつての鉄道工場が残っている。こちらも現在は郊外に移転し、その跡地の有効利用が議論されている。

終戦を迎え、台湾総督府が所有していた建造物や公共建築はすべて中華民国国民党政府に接收された。ここもその例に漏れず、1949年に「台湾菸酒公賣局松山菸廠」と改名された。当時はアジア有数の規模を誇り、最盛期には2000人近くの工員が働いていたという。台北市内ではもちろん、台湾全体でも有数の規模を誇る工場として君臨し

た。

しかし、高度成長期を迎え、経済規模が拡大していくと、こういった産業施設はより大きな敷地を求めて郊外に移転することが増え、役目を終えることが多くなかった。また、施設の老朽化や再開発によって消え去ったところも少なくない。この場合、1988年に工場機能が移転し、その後は長らく廃棄されていた。

公共空間として生まれ変わったたばこ工場

台湾では1990年代後半から民主化が急速に進められ、台湾本土意識が高揚すると同時に、歴史建築の保存や修復などが盛んになった。日本統治時代の産業施設や建造物も行政による保存対象となるが増え、2000年頃からはその勢いが加速化した。

この工場も2001年に産業遺産として保存対象となった。そして、カルチャースポットとして整備されることが決まった。空間の有効利用が考慮され、さまざまな意図が盛り込まれたが、修復工事にはそれなりの時間がかかり、オープンには2010年まで待たなければならなかった。

現在、この空間は「松山文化創意園區」と名付けられている。敷地からは台北101が見え、信義新都心地区にも近い。園内は大きく繁茂した緑樹で埋め尽くされ、池ではアヒルや鯉が泳ぐ。広大な敷地は散策コースとしても人気がある。

敷地内には事務所や製造工場、機械修理工場、倉庫群が残っている。当時は工場施設以外にも工員宿舎や医務局、公共浴室、託児所などがあり、工場全体が一つの集落のようだったという。

事務所と工場は二階建ての鉄筋コンクリート造りで、両者は当時は珍しかったという階上を結ぶ渡り廊下で繋がっていた。窓枠や扉にはひのき材が用いられ、70年前の姿を留めている。長い廊下を歩いていると、窓の多さにも気づかされるだろ

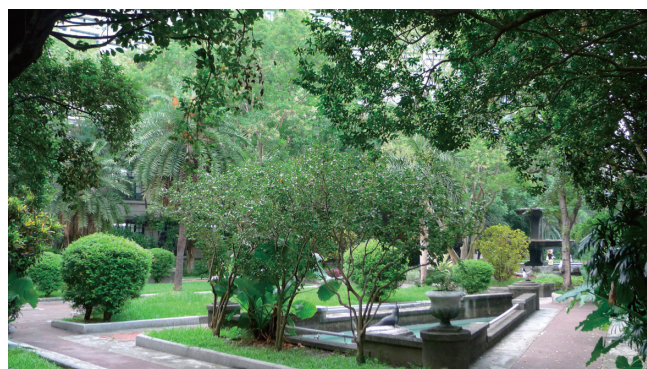
う。これは日当たりを良くするほか、タバコ工場は湿度が高いため、通気性を考慮したものである。

修復については史跡の保存対象になっているため、大幅な改修は許されず、樹齢50年以上の樹木を刈ることも許されなかった。また、修復業者のこだわりも特筆すべきものがあり、使用ができなくなった素材はできるだけ同年代に製造された似た材質のものを探したり、工法についても往時のものを再現したりして、建造物の風格を保つ努力がなされたという。

現在、園内はアートやデザインに関するイベントが随時行なわれているほか、デザインモールの「誠品生活松菸店」ではグッズの販売や実演コーナーがある。レストランやカフェ、ギャラリーの



アートやデザインに関するイベントが行なわれ、週末には多くの人々が訪れる。かつての倉庫も展示空間としてリニューアルされている。



中庭には噴水があり、女性の裸像が置かれている。これは当時の女性工員をモデルにしたものだという。開園時間は朝8時から22時となっている。台北市光復南路133号(02-2765-1388)。



「誠品生活松菸店」はメインとなる建物で、新築した高層ビルだが、館内には伝統工芸の展示や実演コーナーなどがある。宿泊施設もオープンしている。



工場建築群の設計は梅澤捨次郎が行なっている。梅澤は台南市の旧台南銀座の設計で知られており、昭和期に建築に深くかかわった技師である。写真は修復工事が施される前の様子。



かつての工場群は台湾設計館という名で整備されている。開館時間は9時半から17時半まで。月曜休館。

ほか、書店などもあり、週末などは多くの人で賑わう。さらに、宿泊施設もオープンし、こちらも大きく話題となった。

台湾の経済発展を支えた産業施設は新しい息吹を吹き込まれ、生まれ変わった。そういった空間で触れる台湾の最新カルチャーシーンを存分に楽しみたいところである。

華山 1914 文化創意園區

台北の東西を結ぶメインストリート。忠孝東路に面して、この建物がある。ここはかつての台湾総督府専売局台北第一工場で、大きな工場施設と煙突の存在で知られていた。

工場の歴史は古く 1910 年代に遡る。日本による台湾統治も安定期に入りつつあった時代で、人々の暮らしにもやや余裕が出てきた頃である。これを受け、この頃から酒類の消費量が急増したという。ただし、当時、酒造は専売局の管理下に置かれ、台湾にはいわゆる酒蔵というものはなかった。流通していたのは日本本土から持ち込まれたものだった。

1914（大正 3）年、台湾で最初の製酒工場が設けられた。当時は酒やタバコ、塩、そしてアヘンなどが総督府の専売品とされており、重要な財源となっていたが、酒類は今後需要が伸びることが予測されていたこともあり、重要視されたようである。

構内にはかつての倉庫や作業場が残っている。これらの施設は終戦後、中華民国政府に接收され、名も台湾省菸酒公売局台北第一酒廠と改められた。長らく日本統治時代に設けられた設備が使用されていたが、1987 年に工場全体が台北郊外へと移転し、こちらは放置されるようになった。

現在、各施設は芸術展示空間として整備されている。ギャラリースペースや映画の上映スペース、また、コンサート会場としても使用できる空間もある。そして、一部は若き芸術家たちに創作空間と

して開放されている。また、倉庫を用いた個性派ピザハウス「Alleycat's」や創作台湾料理ビュッフェの「青葉新樂園」など、飲食店も入っている。いずれも工場建築の雰囲気を生かしたインテリアとなっており、独特の雰囲気が漂っている。

そのほか、かつては貯蔵庫だったという倉庫群や醸造工場、そして、高さ30メートルという大煙



華山 1914 文化創意園區。広い敷地を誇る公共空間。八徳路と忠孝東路、金山南路の交差点に位置している。



一般に開放されたのは1998年からで、不定期ながら、作品の展示やパフォーマンスが実施されている。



倉庫を用いたピザハウスやカフェなどもある。外国人観光客の姿も頻繁に見かける。青葉新樂園。

突などが残っており、これらは産業遺産として台北市が管理している。後方にはかつて貨物操車場だった土地が緑地となり、憩いの場として機能している。建築散策を楽しんだ後は南国の緑にたっぷり触れてみよう。

樟腦の精製を行っていた工場建築

こちらも台湾総督府専売局が管理していた土地であり、かつては樟腦の精製が行なわれていた。酒造工場に隣接し、こちらでも市内屈指の規模を誇っていた。ここもまた、現在は文芸空間として整備されており、華山 1914 文化創意園區の一部となっている。

この工場群は文化創意園區の入口からはやや奥まった場所に位置している。赤煉瓦の大きな建物が繁茂した亜熱帯の樹木に囲まれ、その隙間から差しこんだ陽光に照らされている。この一角には全部で7棟の建物があり、すべてが赤煉瓦建築となっている。もともとは8棟あったというが、1棟はすでに取り壊されてしまい、その姿を留めていない。

どの建物も天井が高く、空間的な広がり強調されている。また、赤煉瓦の壁面ばかりに目がいってしまうが、屋根には日本式の黒瓦をいれていることにも注目したいところである。

この樟腦工場群は1918（大正7）年から整備が進められた。まず、実際に樟腦の精製が行なわれていたというE棟（西5館）は大正7年竣工で、この一角で最も古い建物とされている。また、同年竣工のA棟（西1館）も樟腦工場だったが、こちらは建坪が205坪と大きい。いずれも屋内に柱はなく、産業施設らしい整然とした雰囲気をまとっている。現在、ここはイベントスペースとなっており、600名から800名の収容が可能だという。

北平東路に面したB棟（西2館）と呼ばれる建物は1930（昭和5）年に竣工したもので、建坪は

94坪、高さは11.4メートルとなっている。竣工時期がやや遅れているだけに建物の構造がより屈強な印象となっている。ここはギャラリースペースとなっており、各種企画展示が行なわれている。



一般公開されたのは2012年10月。現在、複数の店舗が入っており、散策やショッピングが楽しめる。デザインマーケットのようなものも随時行なわれている。



「好様思維・VVG Thinking」は優美な雰囲気 강조했다アート空間。一階はレストラン、二階はグッズショップとなっている。



「好様思維・VVG Thinking」の二階には書店スペースもある。

なお、現在は緑地となっている広場はかつての貨物操車場である。樟脳は日本統治時代の専売品の一つだったが、戦後は施設が中華民国によって接收され、国民党政府が管理する資産となった。

カフェとして再生された老建築たち

昨今の台湾では老建築・老家屋をリノベーションし、カフェやレストランとして再生させる事業が盛んだ。本連載でもこういった物件をいくつか紹介してきたが、いずれも歴史の趣きを後世に伝えるべく、さまざまな努力がなされている。

ここではその中からいくつかを取り上げてみたい。



「保安捌肆 Boan 84」。大胆な吹き抜け構造となっている。一階にはカフェとなっており、こだわりのコーヒーを楽しむことができる。個展なども随時開かれている。

保安捌肆 Boan 84

まずは保安街と延平北路の交差点近くにある「保安捌肆 Boan 84」。この建物は1920年代に建てられたもので、すっきりとした外観ではあるが、表面に据え付けられた擬似列柱がアクセントとなり、凝った意匠となっている。

ここは長らく外科医院として使用されていた。建物は1921（大正10）年に登記がなされている。当時の住所表記は台北市太平町86番地。この住所をたどっていくと、昭和10年の時点では1階は古川栄次郎という人物が飲食店を営んでいたことがわかる。その後、昭和15年に梁術正という人物が建物を借り受け、松田商店という雑貨店を開いた。

終戦後は倉庫として使用されていたと推測されるが、1948年2月18日に意思の謝唐山氏がこの建物を購入。翌年から外科医院として使用されるようになった。もともとは木造家屋だったというが、後にコンクリートで補強工事を受け、現在の姿となった。医院として使用されたのは1階のみで、2階と3階は住居空間となっていたという。

正面には「順天外科醫院」という文字が誇らしげに残されている。現在は保安街と呼ばれているこの路地は、かつて診療所や薬局がいくつかに並んでいたという。日本統治時代は台北でも指折りの人口密度を誇り、活況を呈していたが、その後は没落し、現在にいたる。

現在、この建物は歴史建築の再生事例として注目を集めている。2009年4月30日には台北市から古蹟としての指定を受けた。修復には7年の歳月を要したが、2013年3月に「再生空間」として生まれ変わった。

1階はカフェとなっており、入口の奥は大胆な吹き抜け構造となっている。店は「保安捌肆 Boan 84」と名付けられている。これは「保安街84号」という住所表記をそのまま用いたものであ

る。2階は書斎のような雰囲気、アンティーク家具などが置かれている。そして、3階は「観止堂」という名の多目的スペースになっている。やや急な階段をあがっていくと、舞台がある。不定期開催ではあるが、文化イベントなどが行なわれている。

二條通・緑島小夜曲

台北を代表する歓楽街となっている林森北路は、一帯は終戦まで「大正町」と呼ばれ、日本人が暮らす高級住宅街だった。現在、町の風貌はすっかり変わっているが、路地の中には木造家屋が残り、散策が楽しい。

ここ「二條通・緑島小夜曲」は日本統治時代の木造家屋を用いた喫茶店である。大正末期に建てられたもので、当時の登記簿によると、佐々木八二郎という写真家が所有していたと記載がある。戦後は長らく警察関係の官舎として利用され、持ち主は幾度か変わったが、2009年になって現オーナーである建築家の鍾永男氏が買い取り、建築事務所として使用された。

現在、1階部分は喫茶店として整備されており、2階は鍾氏の事務所として利用されている。当初は建物の損傷がかなり激しかったというが、木造家屋の趣は現代の建築物にはない独自のものがあり、鍾氏はそういった部分をできるかぎり残したいと考えたという。元来の姿がいかなるものだった



1階はカフェとして整備され、木造家屋の趣きに触れることができる。建物の由来については不明な部分が少ない。

たのかを想像し、それに近づける努力が続けられた。鍾氏自身、台湾東部の花蓮市で木造家屋の修復に携わった経験があり、そういった知識がここにも活かされた。

現在は老建築を愛する人々が集うサロンのような存在で、常連客が多い。なお、店名に冠した「二條通」とは戦前の呼び方をならったもので、現在も通称として用いられている。

福州街・滴咖啡～旧尾辻國吉邸宅

ここは閑静な住宅街に残る官舎である。広い敷地を擁し、亜熱帯の植物が繁茂している。この一帯はかつて内地人（日本本土出身者とその子孫）が多く住んでいたため、日本式の家屋や戦前の建物は比較的多く見かけるが、木造二階建てというものは多くない。

この家屋の主は尾辻国吉という人物である。日本統治時代初期、台北市内の道路設計に功のあった人物で、台湾総督府民政長官の後藤新平の指示下、1910（明治43）年の市区改正を契機として造営された三線道路の設計担当者である。三線道路は旧台北城の城壁跡地を用い、約40メートルという道幅を誇った道路である。後藤は「パリのシャンゼリゼ通りのように」と指示を出したと伝えられ、本来の実用性のみならず、都市としての美観を兼ね備えることも意識した道路だった。

これに従い、尾辻はドイツをモデルに植樹を施したと伝えられる。これは植物学者の田代安定の提案によるものだった。亜熱帯性の植物群が選ばれ、具体的には菩提樹、鳳凰木、南洋杉などが植えられた。尾辻はさらに、歩行者のための空間確保も重視していたと伝えられる。

尾辻は1907（明治40）年3月31日に台湾総督府に赴任し、官房営繕課に配属されている。その後、一度は台南方面に出向いたが、台北に戻った。1922（大正11）年7月には専売局技師となり、1931（昭和6）年11月31日には専売局営繕課長

に就任している。

1930（昭和5）年に刊行された『台湾建築会誌』には尾辻邸全体の見取り図が掲載されている。これによれば、建物は台湾の気候を意識した造りになっており、風通しや除湿が考慮されていたという。一階には応接室や食堂、客間、炊事場などがあり、女中のための小部屋などもあった。また、二階には寝室と子供部屋が設けられていた。

日本統治時代の住所は台北市千歳町2丁目11番地。千歳町は兎玉町や佐久間町と並び、内地人が数多く暮らした地区だった。邸宅前の道路は現在、福州街と呼ばれているが、現在もわずかながら戦前に建てられた老家屋が残っている。

戦後、この建物は国立台湾師範大学の校長官舎になっていた。個人の邸宅だったこともあり、長らく内部の様子を知ることはできなかったが、高い塀越しに見える建物は独特な風格を漂わせており、郷土史研究家の間ではよく話題に上がる建物だった。

2011年6月25日、台北市はここを市定古蹟に指定し、保存を決定した。現在も管理者は国立台湾師範大学となっているが、歴史建築の有効利用を目指して修復工事が行なわれた。現在はカフェとして生まれ変わっており、市民に開放されている。全体的に往時の趣きが色濃く感じられるので、館内の見学は楽しい。歴史建築の雰囲気をつたつぷりと楽しんでみよう。



館内は日本統治時代の官舎によく見られた和洋折衷のスタイル。板張りの応接間には往時の雰囲気が残っている。



玄関脇の部屋も往時の姿を保っている。亜熱帯の気候を考慮し、風通しと日当たりに配慮がなされた設計となっている。現住所は台北市中正区福州街11号。

市長官邸藝文沙龍—旧台北州知事公邸

ここは日本統治時代の台北州知事公邸だった建物である。当時の高級宿舎によく見られた和洋折衷の造りで、基本的な間取りは当時から洋風となっていた。家具などについても舶来物で統一されていたと言われている。

建物の竣工は1935(昭和10)年。建坪は152坪となっており、邸宅としては当時最大級の広さとなっていた。敷地内に植えられた植物は亜熱帯性のものだけが選ばれ、濃い緑が木造家屋のたたずまいを際立たせていたという。

戦後は台北市長官邸となっていたが、ここ数年の間は放置され、荒れ果てていたという。それを台北市が修復し、芸術サロンとして市民に開放したのは2000年11月のことだった。いわゆるリノベーション物件の中では早期に整備され、この成功が歴史建築を公共空間として市民に開放する

という手法の先駆けとなった。そして、現在の潮流に繋がったとしても過言ではない。

館内の各部屋は多目的スペースとなっており、展示室のほか、講演や会議などにも利用されている。また、ベランダも併設されたカフェのテラス席となっている。そのほか、詩集や画集、文芸作品などの販売コーナーもある。散策の途中に立ち寄ってみたい休憩スポットである。

なお、今回で本連載は終了となる。全28回にわたって紹介してきた台北の歴史だが、今も台湾は激変のさなかにあり、台北という都市の風景も刻一刻と変化を見せている。読者諸氏においては長期にわたる連載におつきあいいただき、心からお礼を申し上げたい。次回からは「台湾の歴史を歩く」と題し、台湾各地・各都市の歴史について、日本との歴史的絡みに触れつつ、その歩みをたどっていきたいと思う。



外観は和風建築の趣を保っており、今や数少なくなった木造建築として、台北市が指定する古蹟となっている。戦後は台北市長公邸として使用されていた。現住所は中正区徐州路46号。

片倉佳史 (かたくら よしふみ) 1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も頻繁に行なっている。著書に『台湾に生きている日本』、台北生活情報誌『悠遊台湾』、『台湾 鉄道の旅』、『台湾に残る日本鉄道遺産』など。最新刊は『古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年』(祥伝社)。ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>